

まちづくり懇談会内容【公開用】

日 時：令和 2 年 11 月 12 日（木）15：58～17：51

場 所：御園公民館

出席者：19 人

1. 開会

2. 町長挨拶

※配布資料確認および日程説明

3. これからのまちづくり（資料 1 参照）

- ・栗山赤十字病院の改築について

4. 懇談

5. その他（情報提供）

（1）光回線の全面開通について

（2）栗山高等学校と介護福祉学校の状況について

（3）新型コロナウイルス感染症対策について（資料 2 参照）

- ・町民の皆さんへ新型コロナウイルス感染症の影響に対する支援一覧（資料 2－1 参照）

- ・事業者の皆さんへ新型コロナウイルス感染症の影響に対する支援一覧（資料 2－2 参照）

- ・新型コロナウイルス感染症の影響に伴う国民健康保険税・介護保険料・後期高齢者医療保険料の減免について（資料 2－3 参照）

（4）空き家の情報提供について

6. 閉会

《懇談内容》

【栗山赤十字病院の改築について】

町民：資料を見る限り、町の基本方針としては、建物が新しくなって耐震構造になることと、MRI の機械が入るだけで終わるということで、新しい診療科が増えたり、新しい施設ができたりということではないということか。

町長：現実的な問題として、今の耐震性のない建物を解体して新しい建物をつくるのがまずひとつとしてある。MRI などは、いま不十分な医療機器をこの機会に導入して、住民の要望に応じていく。ただ、建物が新しくなれば良いというものではなく、地域包括ケアとして病院を中心にして老人介護施設などと連携をし、これからの高齢化社会に備え持続可能な体制を整えていくための病院の位置づけにしていく。現段階は診療科も最低限を維持していく考え方になる。なるべく多くの町

民の声を聞いて、病院経営の問題もあるが、充実していく考えでいる。ただ危ないから建て替えるという考え方ではないということをご理解いただきたい。

町民：ひとつお願いがある。町は若者定住にも力を入れていると思うが、うちも 8 歳と 4 歳の子どもがいるが、2 人とも岩見沢の病院で出産している。下の子は出産の立ち会いに間に合わなかった。出産後の小児科も、町内の小児科に診てもらっているが、そこで足りないことがあれば岩見沢まで行っている。しかし、診察が混んでいたり、午後 3 時で診療時間が終わっていて間に合わなかったりすることもある。今後、地域おこし協力隊や新規就農者が栗山へ来た時、子どもを産みたいとか、子どもを育てたいと思った時に、地元で安心して預けられる医療機関がないとなると、他の町に行ってしまうのではないかと。そういったことへの配慮をしていただけないかと思い、このような質問をさせていただいた。

町長：他の会場でも同じような意見をいただいている。町で子育て支援に力を入れているのであれば、総合病院に小児科を入れるべきではないかといった意見もある。実現できるかどうかはわからないが、これから専門家と検討委員会で議論していくので、このような意見があったことは議論のテーブルに乗せていく。

町民：どこの町も人が減っている。栗山と由仁は農協も合併した。これから 10 年、20 年先を見据えると、もう少し由仁と医療連携の話をしていくということはないのか。

町長：由仁と拠出し合っただけということであれば、由仁もお金がないと思われるので、なかなか結びつかない。

町民：今後、人口が減っていけば、由仁の病院も難しい状況になると思う。

町長：政治的な部分もありなかなか難しい。以前給食センターを由仁と話しあって栗由橋周辺で建設するといった話もあったが、直前で破談となったことがある。去年、由仁が単独で給食センターを作っている。将来を見据えてそのような考えを持ったとしても、由仁との連携はなかなか難しい。

町民：病院の大きさは小さくなると思うが、駐車場が狭くなる気がするが、どうするのか。

町長：まだ正式に設計もできていないのではっきりは言えないが、現在 15000 m²ある敷地の中間位に病院が建っている。新しい病院は、その南側に建てるので病院を休むことなく改築ができるということと、今ある建物を解体するのでそちらを駐車場として確保できる。

町民：それだと、今と変わらない。なぜなら、建物の前は広がるが裏の職員駐車場が無くなることになる。そういった部分はこれから決めていくということか。

町長：土地の有効活用などは今後決めていくことになる。

町民：まだ概要は決まっていないということか。週 1 日しかやっていない診療科が増えると、その診療科を受診する人が集まることになるので、駐車場に車が止められなくなると思う。今の場所に建て替えるのであれば、そういったことも考えた方がいい。

町長：今後、検討していきたい。

町民：現時点で緊急医療の体制の検討はどうなっているのか。

町長：栗山赤十字病院は、救急告示病院として救急の受け付けをしている。新しくなっても継続して対応をしていってもらう。救急に関しては、受け入れを断られたなどの問題もあるが、それなりに対応していただいている。今後も継続してやっていただくことで考えている。

町民：受け入れ態勢は現状維持で進んでいくような感じになるのか。

町長：そうなる。

町民：今はどうかかわからないが、レントゲンぐらいなら見ることはできるが、CTなどで撮影した画像データを分析する人がいないということがあった。こういったご時世なので迅速に分析してもらえないと困る。たしか分析する人が札幌から来ているということで、分析するのに数日かかるということだった。検査室のそばに何億円の機器を導入したと大きく張り出している、それだと意味がないと思う。

町長：栗山赤十字病院に確認してみる。

町民：せっかく高額な機械を買ったのに、何にもならないと思いながら張り出されて掲示を眺めていたのをちょっと思い出したので言わせていただいた。

町長：ほかの会場で出ている意見を紹介させていただく。診療科目で整形外科の午後診療をしていたきたいといったことや、眼科、皮膚科、泌尿器科、循環器科は週1回しかやっていない。用事があって診療日を逃すとまた2週間くらい診療してもらえないので、せっかく診療科があるのであれば最低でも週2回くらい診察してもらえないかといった意見も出ていた。また、その一方では、建設に関わる町の実質負担はないといったことはわかるが、一番大事なのは改築後の病院経営ということで、これ以上、町からの補助金が増えるということのないように、診療科の中で、他の町と連携できるのであれば、栗山赤十字病院の診療科を縮小して、交通の便を良くするなど病院経営を第一に考えるという意見も出ている。また、先ほど話にも出てきたが、小児科や産婦人科を新設していただきたいなど、さまざまな意見をいただいている。検討委員会で議論していきたい。町民の利便性と同時に病院経営と両面で考えていかないとならない。

町民：おそらく人口が多いのは団塊世代が最後。あと20年くらい。その後はどんどん人は減っていくことを考えると、今と同じような経営形態にはならないのではと思う。

町長：そのことも指摘されていることで、新病院の開院時にはベッド100床でスタートするとお話ししたが、これから人口減少、患者数の減少のことを考えると100床のベッドも余ってくることが予想される。そこを埋めるための集客する対策も考えていく。たとえば隣町の個人病院では送迎バスを出している。そういう交通の利便性なども改めていけば入院患者などの確保策の一つになるのではないかというお話も受けている。

町民：間違いなく、20年後には人口は減ってくる。

町長：今から20年後ぐらいだと、おそらく70床ぐらいしかいらないと思う。だからといって、新しい病院を作る時に70床にしてしまうと、今いる患者さんが30人ほど足りなくなってしまうので、それは厳しいと思う。病院の難しい問題だと思う。

町民：先ほど、100床が埋まっていると聞いたが、そのうち町民はどれぐらいになるのか。

町長：入院患者の約8割が町民。入院は81%、通院は79%が町民になる。

町民：私たち家族は、ほとんど栗山赤十字病院に受診したことがなく、母や祖母はずいぶんお世話になった。私の場合、岩見沢の病院を選択することが多い。岩見沢の病院だとおそらく8割が市内の人間ということではないと思う。これは要望だが、資料に書かれていることは病院としての機能をそのまま維持して、将来的に病床数を現状の状態から合わせていくという話だと思うが、できることならパワーアップした、選ばれる病院を作ってもらったほうが、うちとしては岩見沢に行くより、栗山赤十字病院に行った方が安心できるといった病院にしてもらったほうがありがたい。建て替えるのであればそのようにやってほしい。きっと何か、患者が減っていくから病院を小さくするというのではなく、やり方次第では、大きくしても経営が成り立つようなやり方もあると思う。

おそらくこれから検討委員会が開かれると思うのであれば、要望としては大きな安心できる病院を近くに欲しい。

町長：要望としてお受けしていく。

町民：スケジュールの中にある、建設がスタートしてから解体しないで建設することになると、現状の場所に建つと思うが、その間の1年間ぐらいは駐車場などどのようなようになるのか。

町長：同じ敷地の中で考えているが、今ある建物の南側に整備をして全部移動して、今ある建物を解体し、そこを駐車場に整備していく。駐車場は狭くなることはない。

町民：令和6、7、8年ぐらいはそのような計画で行くということか。

町長：どういう手法で整備するかは、これからになる。外構の工事などもあるので、なるべく迷惑をかけないようにしていきたい。

《質疑応答》

【その他（情報提供）】

町民：栗山赤十字病院でコロナの検査が受けられると聞いた。自主検査は3万円程度かかるはずだが、保健所から要請があるとほぼお金がかからないということ聞いた。

町長：栗山赤十字病院の検査の関係について、担当から説明する。

日赤改築室長：今週の月曜日（11月9日）から、栗山赤十字病院に向かって右手にプレハブが建てられ、そこを発熱外来として、発熱がある方の診察を行う場所ということになった。発熱があるといっても、インフルエンザやコロナなどいろいろあると思うが、栗山赤十字病院としては、発熱があるとなればコロナを疑って、別棟の発熱外来で診察を行うということになる。検査については、発熱があつて医師の指示で検査を受ける場合と、濃厚接触者として保健所から検査を受けるよう指示を受ける場合がある。保健所からの指示の場合は無料で検査を受けることができる。ただ、症状はないけれど心配なのでコロナの検査を受ける場合、自己負担となるが受けることができる。費用は、PCR検査が25000円、抗原検査が1万円で受けることができる。ただ、PCR検査は、栗山赤十字病院で行うのは抗体の採取のみになるので、実際の検査は札幌市で行うことになる。検査結果が出るのは、だいたい2日程度かかる。抗原検査は、栗山赤十字病院内で検査できる機械があるので1時間程度で検査結果が出る。ただ、検査の機械自体が30人分の検体を一度に検査する形になるので、予約状況によっては、何人か、ある程度まとまった形で検査することになる。そのような場合は、検査の結果が出ると電話で連絡が行くことになる。

日赤改築室長：また、65歳以上の方が検査する場合は、特に症状が無くても1回だけ無料で検査が受けられる補助制度を立ち上げた。不安がある方、関心のある方は、まずは午前中に病院の専門電話に連絡して予約をしてもらうことになる。

町民：そのことに関連するのだが、実は少し前に北海道教育委員会主催のバスケットのイベントにうちの子が参加したとき、コロナ感染者がいて、うちの子は濃厚接触者ではないと判断されたが、たまたま体調が悪かったのでその検査を受けて陰性が出たので良かったが、その濃厚接触者の判断というのが、保健所が少しあいまいなところがある。札幌の保健所が濃厚接触者の判断をするらしいのだが、情報源は岩見沢保健所で、そこに連絡を入れるのが学校側から入れるということになる。たまたまうちの子は発熱の症状があつたので、学校側から保健所へ強く言ってもらい検査を受ける

ことができ、お金も数千円で済んだ。それで思ったことは、もうワンクッション、町の方であなたたちは検査を受けた方がいいというような仕組みを作れないか。

日赤改築室長：ちょっと難しいと思う。基本的には、保健所の判断になる。陽性患者とどう関わったかを保健所の保健師がすべて調査することになる。一般的にはマスクなどの感染防止対策をしていない状態で、陽性患者と 1m 以内で 15 分以上会話や接触があった場合、濃厚接触と判断される。あと、陽性患者と一緒に住んでいる方が濃厚接触者となる。あとは、保健所の調査の中で、このケースは濃厚接触になると判断した場合になる。基本的には道内一律の判断となる。

町民：私が言いたいのは、もうワンクッションだけほしいと思った。例えば、そういう状態で、JR の席に座った時も、おそらくそれぐらいでは濃厚接触にならない。今回のケースも保健所からは他の部員も濃厚接触にならないから検査を受けなくていいと判断が出ている。しかし、コロナを発症した人と一番近くにいた人は、自分で自主的に 2 週間学校を休んだ。もし、検査を受けることができなければ休まなくてもよかったと思う。もし感染していて人に移してしまったらまずいし、検査を受けるのは実費となるとどうしても躊躇してしまう。それであれば検査を受けさせればいいのかといった話も周りからも出ていた。栗山はまだ感染者が出ていないみたいなので、そこまで心配はしなくてもいいかもしれないが、できれば保健所の基準とは別のところで町として、費用の補助をして検査を受けられる体制があれば、もう少し安心できるのではないかといった要望。

日赤改築室長：65 歳以上の補助に関しては、基本的に道内の基準で行っている。地域で検査を受けられるキャパシティがどれくらいあるのか。陽性患者との濃厚接触者の検査を受けている人がどれくらいいるのか、そういった枠をある程度定めて行っている。言われた通り、感染者の近くにいた人と 1m 離れた人とで濃厚接触かどうかの判断になるケースは相当ある。ただ、どこかで線引きをしないと、同じフロアにいる人全員が濃厚接触となると保健所が検査できなくなることが危惧されている。札幌市で 1 日に 100 人以上感染者が出ている状況で、それに関連する濃厚接触者は 5 倍、10 倍いる可能性がある。そういった方も検査に回されている。それにさらに濃厚接触者ではない人が検査をするとなると検査する人でいっぱいになってしまう。

町民：言いたいのはそこではなく、あくまで感染予防の話。

日赤改築室長：濃厚接触者が増えると検査が追い付かなくなるという話になる。

町民：検査が追い付かなくなった段階では、あまり気にならない話になるのかなと思う。

日赤改築室長：現状、今は検査が追い付いつかない状況になっている。

町民：それは、岩見沢に感染者が出てきたからではないか。

日赤改築室長：岩見沢に限らず、道内全域で感染者が出てきたからになる。

町民：岩見沢市立病院がやっている検査は、私が行ったときはガラガラな時期でその日のうちにすぐ結果が出た。今、栗山で検査をしたとして、同じ検査機関へ持って行くのであれば検体の数が増えて大変だと思うが、栗山の場合は感染者も出ていないので検査も止まっている。接触した範囲を保健所の基準に合わせてしまうと、感染者が紛れてしまうことが出てくるのではないかと。それであれば、町でもうワンクッション、ほんのちょっとだけ幅を持ってもらえると安心するのではないかとと思う。

日赤改築室長：そこで問題なのは、濃厚接触になっている方は、町では抑えていない。あくまでも保健所で持っている情報になる。そうすると、家族がお子さんの接触などを知って、申告を受けて検査をやるということになる。そうすると、制度として難しくなってくることが正直あるかと思う。

町長：この問題は、首長会議などにも参加しているが、濃厚接触の判断基準が、あいまいというわけではないが、専門家が決めているのでわかりづらいとかそういうことがあるので、統一した見解が出せないかといったことが、首長からも出ている。ただ、今回は誰も経験したことがないコロナというものをきちんと整備して、分析して経験を積んでいる最中。言われることは十分わかるが、濃厚接触者の基準に少し幅を持たせて、とあいまいに整備してしまうと混乱を招いてしまう。町が65歳以上の方に対する検査に国の補助に上乗せして支援していくことで、もう少し幅を広げて町単独費でもやったらどうかといった意味合いも含まれているのかと思う。なかなかそこまで手が回らない実態もある。

町民：そこまで考えた発言ではない。ただ、自分の子どもがそうやって、北海道教育委員会主催のイベントで感染者と接触して、自分で学校を休んでいる生徒までいるとなったら、何が嫌かと言ったら、自分も感染しているかもしれないという不安だけ。検査も何万円もかかるとなると尻込みしてしまうし、検査に行かなくていいと言われてたら無理に行くのもどうかというのものもある。そんな中で、学校を2週間も休む子どもがいるとなると、それはあんまりじゃないかと思う。それであれば、もう少し広い枠で特殊な例かもしれないが、町が検査を受けて来いよと言ってもらえたら安心して生活できるのかなと思っただけの話です。

町長：難しい問題だが、またそういう機会があれば、濃厚接触者のきちんとした目安などを示していただけるように発言していきたい。

町民：今の検査のことで任意で受けて陽性が出た場合はどうなるのか。

日赤改築室長：任意で検査を受けたとしても体調が悪くて受診したのと同じ扱いになる。すぐに病院から保健所に連絡がたって、入院の調整を図る。感染者は原則入院になる。無症状であれば、ホテルでの療養ということもある。最近多くなってきた札幌では自宅療養ということもある。そういった選択になってくる。

町民：これから年末に向けていろいろな集まりが公民館や会館などであると思うが、南部公民館には感染対策などのポスターが貼られているが。会館などに貼っておけばガイドラインがわかるなどそのような感染対策のポスターは町で持っていないのか。あれば公民館に貼っておきたい。

総務課主幹：感染対策のチラシやポスターなど作成したものがあるので、お渡しすることはできる。ぜひ貼っていただきたい。

町民：どの町も地域おこし協力隊が活動していると思うが、どのようなことをしているのかお聞かせ願いたい。商店街にある、くりとくらは町からの補助金で経営しているみたいだが、商店街の飲食店と知り合いなのだが、そちらは遅い時間に仕入れをし、やりくりをしてお客さんが来なくてもお店を開けて頑張っている。その隣で、町からお金をもらって、店を開けたり開けなかったり、お客さんがいなければお店を閉めてしまうとか、そのようなところに町がお金を出していいのかと思う。そうやって開店したお店なので、役場の人もそこに通っているのは別にいい。しかし、そんなところにお金を支出して、昔からある飲食店が経営努力をして頑張っているのに、それはないじゃないかと思う。

町長：まず、地域おこし協力隊の実績と概要についてお話をさせていただきたい。栗山の地域おこし協力隊制度は、私が経営企画課長時代から行っている事業になる。今まで26人が地域おこし協力隊として来ていただいている。現隊員が7人いて19人が3年間活動している。活動終了後、どこか違う町へ行くか、定住するかということになるが、7割ぐらいが栗山町に定着していただいている。外から来る方は、われわれにはない何か思っている。新風も吹かせてくれている。そこに期待

しているということもある。そういった方々、栗山に根付いて定住していただける方は頑張っているということになる。そのような中で、今言われたことというのは他の会場でも出ている。ただ、あの店はクラウドファンディングといって寄附を集って、他の人たちも資金を出して、自分たちも作業をして作った店になる。町は、国の補助制度を活用していて、町単独費が出しているわけではない。そのような中で何とか店をやっている。町が店の維持など補助を出しているわけではない。町は、ふるさと納税の事務をやっているから、その事務委託費を払っているわけであって、経営に対する補助をしているわけではない。よく勘違いされている方もいて、町がくりとくらに入れ込みすぎているのではないかと聞いた話がよく聞いたりするが、彼らは何とかやっといこうと頑張っているから、私たちが応援できることは、あの店などに行くことになる。

町民：ふるさと納税のお金でもいいけど、町に一旦入ったお金ではないか。

町長：ふるさと納税の受付などの事務を行ってもらっており、その事務費を払っているわけであって、ふるさと納税で納めていただいた寄附を支出しているわけではない。

町長：その他にもいろいろな人がいる。定住している人には、雨煙別小学校 コカ・コーラ環境ハウスで自然の関係の仕事をしている人などもいる。

町民：自治会に何人も新規就農で入ってもらって、みんなと仲良くやっているからそういうのはわかる。補助金をもらって何年かというのがあるが、失敗したといって、どっかに行ってしまったらそれを返せということにはならないのか。

町長：ならない。

町民：それはおかしくないか。最低でも何年住むとかそういうものがないとおかしい。

町長：国の制度なので、そのようになっている。

町民：すごく疑問に思う。

町長：地域おこし協力隊を繋いでいくという人もいると思う。みんなそういう人ではないと思う。

町民：そういう規定というものが何もないからだと思う。

町長：新規就農の場合はそういった規定がある。もしやめた場合はといったものがある。

町民：来たものを何でも受け入れるのではなくて、そういった規定は必要なのではないか。

町長：地域おこし協力隊の財源は国から来たものですべてやるけれども、そういったものを考えるということ。

副町長：地域おこし協力隊は、町の業務をやってもらっている。それに係るお金を支払っている。

町民：その成果はどれくらい出ているのか。

副町長：地域おこし協力隊として2人が栗山に来て協力隊を3年間してもらい、自分で法人を立ち上げ、営業を行っている。そこで、町のふるさと納税の受付業務を行ってもらっている。1年間で1万6000件以上の寄附の受付業務から返礼品をお返しする業務まですべてを行ってもらっているからそれなりの業務量がある。事務委託ということで受けてもらっている。昨年の寄付総額は2億数千万円という寄附を受け付けていただいている。そういう部分においては効果があったと認識している。

町民：協力隊を3年間やっているということは、町からお金を受け取らず自力でやっていくということにならないのか。

副町長：協力隊の3年間が終わって、法人を立ち上げて、その法人に対して町がふるさと納税の業務を請け負ってもらっているということになる。あの店の営業に対して町がお金を出しているわけではない。

町民：ふるさと納税の窓口業者は競争入札にならないのか。

副町長：協力隊の時に、ふるさと納税の業務をしていたので、そのノウハウを持っているところが法人を立ち上げたので、そこに対して委託をお願いしたということになる。

副町長：ふるさと納税の業務に合わせて、今年はコロナの影響で難しいが、道外のフェアに行っている PR などの活動をしている。

町民：新聞やテレビなどを見ていると、町内だけの PR しか見えない。

副町長：その結果として、昨年は 2 億数千万円という寄附を持ってきている。

町民：それがどんどん増えているのならいいけれども。

町民：ノウハウを持っているからって、独占できるのはまずくないですか。それをやっていれば、町からずっと仕事が受注できるというのは、この仕事ができるから他の人を試さないというのはちょっと問題ではないか。もしそういうのがあれば、公募するべきではないか。

町民：もっと全国的に PR 上手な人がいるかもしれない。

町民：最終的にそこが仕事を取っていくのであればいいが、ノウハウがあるからといって町から常にここに発注を掛けるというのはまずいような気がする。

町長：法律上の問題はない。町がその人にお願いすることが、公益上一番いいと判断されれば、そこは随意で委託ということになる。

町民：そういうふうに思う人もいるということ。法律うんぬんではない。何となく公平ではないのではないかと思ってしまう。

町民：ちょっとおかしいと思う。

町民：くりとくらで何をやっているのかわからない。

町民：ハサンベツ里山の最終的な目的は何なのかわからない。あの事業は同士の集まりでやっているのはわかるが、あの人たちの最終的に何を目的としているのか。町長も参加されているが、役場の誰かが窓口になっていると思う。そのあたりを聞かせてほしい。

町長：ハサンベツ里山計画実行委員会が、今から 20 年前に町民有志の委員会が立ち上がり、里山の再生活動がスタートした。その前に御大師山に国蝶オオムラサキが発見されて、栗山の豊かな自然環境を守り続けていく機運が高まり、あのグループができた。それから 20 年が経過したということになる。最終的な目的というより、あの里山の豊かな風景や自然を生涯に渡って維持していこうというのが目的になる。ハサンベツが子どもたちの教育のフィールドになっている。何万人もの子どもたちが、あの場所に訪れているので、あの場所は栗山の宝だと思っている。

町長：あの人たちの活動が高齢化してきて、停滞していこうとしていることから、お手伝いしていったあ風景を残していきたいと思う。それが目的になる。維持していくための修繕など年間いくつもお金はかかっているが、大きなお金は出ていない。窓口は教育委員会になっている。

教育長：一番の大きな目的というと、子どもたちが高校、大学、就職などで町外に出て行ってしまいう状況がり、何とか子どもたちには町に戻ってきてもらいたい。そのために栗山がどんなに素敵どころだったかを早い段階で分かてもらいたい。栗山の魅力の一つが、他の町に比べるとはるかに整った自然環境になる。たくさん子どもたちがハサンベツで遊んでいる。20 歳を過ぎて、昔ここで活動したと言って子どもたちが戻ってきてくれている。

教育長：栗山のことを考えてもらう学びの一つに自然というものがある。自然の中でいろいろなことを体験することで、いつか社会に出たときに栗山にまた戻ってきてもらいたい。

教育長：もうひとつは、自然と触れ合えるところが周りにはないということ。町外からもハサンベツを訪れて自然教育に参加してもらっている。そういったところは維持していかなければならない。ハサンベツの日という作業日では、町民がボランティアで参加してもらっている。町内の介護福祉

学校の学生なども協力してくれて、川の修繕などの作業をしてもらっている。そういうことをやってくることが、町の価値を上げていくことになっていくと考えている。ハサンベツで将来この町を担ってもらう子どもたちを作りたいと思っている。

町民：私もハサンベツには、孫を連れて行く。本当にあの場所がいい。小さい頃は、このあたりでもホテルもいたし、エビを取ったりカニを取ったりして遊んだ。そういった子どもの頃に遊んでいた思い出というのがずっとある。あの場所へ行くと、そういったものがよみがえってくる。自分の孫にも、こういうところがあるということを教えてあげることが、人間的に豊かになってくる。人間性を生み出すところだと思っている。ああいうところにはいくらでもお金をかけてもいいと思う。

町民：ああいうところで遊んで気持ちが豊かになってもらいたい。人間社会のストレスの中に入っていくのだから、せめてそのときぐらいは思い出を作してほしい。高橋慎さんは、よくボランティアでやっている。あの場所ではみんなボランティアでやっている。

町民：町外の人が利用するときはお金を取っているのか。

教育長：あの場所を利用するというよりも、学校単位で来て宿泊学習として雨煙別小学校 コカ・コーラ環境ハウスに宿泊し、あの場所で活動するということが多い。他は部活動の夏季講習会の中で、自然体験をしたいということで依頼を受けることがある。もちろん親子連れということもある。ボートで川下りなど機材を使うものにはお金をいただいている。ただ、あの場所に行ってホテルを見たから1回いくらというようなお金を取るようなことはしていない。

町民：ホテルはあの場所に放しているのか。

教育長：ホテルはハサンベツのかなり上流の方にいたものを長い時間をかけて、入口の大看板あたりにまで下りてきている。河川整備をしながらやってきたことで、下流にまでホテルが下りてきたことになる。どこかから取ってきたものをあの場所にはなしているようなことではなく、もともと生息しているホテルになる。

町民：あそこは、みんなボランティアでやっているし、大変さもわかる。絶対子どもたちを一回は連れていくといい。

教育長：ぜひとも見に来ていただきたい。

17 : 51 終了